

炉辺の枕(11)

『噺の肴 らくごの副食本／小佐田定雄』

人生に落語は必需品

美賀多台 つだわたる



落語は若い時から好きでした。

落語家を初めて見たのは、憶えている限りでは、NHK番組『ジェスチャー』の柳家金語楼であったと思います。中学生時代に『ヤングオーオー』で三枝(文枝)、その頃の若手であった「ザ・パンダ」小染、八方、きん枝(小文枝)文珍さらに深夜ラジオで仁鶴、鶴光を聞きました。小米(枝雀)、小春(福團治)、鶴瓶、朝丸(ごこぼ)もテレビやラジオで見っていました。

読売テレビ『笑点』も落語家を身近なものにしました。その当時の円楽、歌丸、小円游、こん平等は、ここで知りました。

しかし彼らのそんなものを見聞きしたからといって、それで落語を好きになったのではありません。上方落語再興の四天王、松鶴、米朝、春団治、小文枝(文枝)の落語を聞いたので、その魅力にとらわれました。

でもそれは実演ではなく、やはりラジオ、テレビです。働き始めてCDを借りて聞きました。

50歳代になって神戸文化ホールの『東西名人選』に通いましたが、そこで小さん、小三治の江戸落語の味を知りました。談志は落語を「イリュージョン」と言いましたが、彼自身の行動が幻想でした。志ん朝はどこで見たのか記憶はありませんがうまい落語家だと思いました。

先ごろ亡くなられた木津川計さんが創刊された雑誌『上方芸能』(1968年創刊)は、古本屋で初期の号から買いました。上方落語を含めた演芸に関心がありました。

今となっては、どのような経過をたどって落語を好きになったのかよくわかりません。

私が本格的に落語の実演を見始めたのは、やはり新開地の寄席、喜楽館が2018年に開館して以来です。それまでは『東西名人選』であり、大阪の繁昌亭、神戸でも兵庫区民寄席、吉弥九雀文之助の落語ヴィレッジも行きました。東京に出張すれば新宿の末広亭、上野の鈴本演芸場も行きました。

でもこの頃は時たま落語を聞いているという程度です。

今は喜楽館が我が寄席です。月一回行っています。そして会員になっている神戸市役所センター合唱団のえびす寄席は、これからの上方落語を背負うであろう雀太を育てたことで高く評価しています。

落語を幅広く味わうために

落語の本はよく読んでいます。一つは落語家について書かれたもの、もう一つは落語につい

て書かれたものです。落語自体を書いてある速記本、例えば『古典落語体系』も数冊持っていますが、これはあまり読んでいません。落語はやはり噺家が喋るもので、同じ噺であっても演者によって全く違うものになりますから、読むものではないのです。でも『林家たい平 快笑まくら集』『柳家花緑 特選まくら集』のような落語の本編に入る前のまくらは読んでも面白いものです。落語家の資質も出ています。

落語家が落語について、あるいは自身について書いた本では『赤めだか／立川談春』『落語家論／柳家小三治』『現代落語論／立川談志』『子弟／笑福亭銀瓶』等を読みました。

評論家などが落語家について書いた本もたくさん読んでいます。『随筆 上方落語の四天王 松鶴・米朝・文枝・春団治／戸田学』『青春の上方落語 笑福亭鶴瓶 桂南光 桂文珍 桂ざこば 桂福團治 笑福亭仁鶴／小佐田定雄』を読めば現在の上方落語の源流みたいなものが分かります。

今回紹介する『噺の肴』は、落語作家が古典落語の噺自体について分解分析して、いろいろと蘊蓄を傾けるものです。

古い本で『上方落語ノート／桂米朝』『上方演芸大全／大阪府立上方演芸資料館編』を若い時に買ったのですが、あまり読んでいません。実際の落語を聞くようになって、この類の本を読み始めました。

落語は言葉ですから、言葉の意味が分からないと面白くありません。新作落語はだいたい現代の噺ですから言葉の意味は分かります。古典は江戸時代や明治時代など100年以上昔を舞台にするものが多く、時々わからない言葉、生活実態が出てきます。そういうことを現代人が分かるように書いた本です。

落語を分類すると「芝居噺」という分野があります。芝居狂いの人々が出てくるのですが、江戸時代の歌舞伎が噺のネタです。

「蔵の中の忠臣蔵一蔵丁稚」「落語手本忠臣蔵一忠臣蔵の噺」の項がそれです。

忠臣蔵ですが江戸時代の『仮名手本忠臣蔵』は赤穂浪士ではなく、室町幕府に移し替えて名前もちょっと変えているので、それが分からないと落語の世界に入っていきません。噺に沿って、名前だけではなく、芝居の工夫、噺の工夫などを解説しています。

「駕籠に乗る人かつぐ人一住吉駕籠」は駕籠という乗り物、駕籠屋の仕組みなどを紹介しています。

駕籠は「親方からのレンタルで、基本料金は親方が取ってしまう」ので、実際に駕籠をかつぐ人の儲けは「走り増し」「逆手」と言ったチップだったそうです。

これは私が好きな噺ですが、そういう駕籠屋の実情を知れば切ないものがあります。

この類の本を読んで落語を聞くと、落語の世界が広がり、笑いだけではない、また別の面白さを感じるようになりました。